

# いざ夢の都へ ひばりの先生になる

## 朝雲流れて 金色に照り

戸田中央医科グループ創設者  
中村隆俊の半生

【第4話】

隆俊は1950(昭和25)年3月、北海道大学医学部を卒業し、4月から東京医科大学でイン턴として臨床を学び始めることになった。

東京に行くといつても、当時、札幌から東京までは恐ろしく遠い旅程だった。函館まで7時間、青函連絡船が4時間、東北本線が13時間、全行程は24時間で、ほぼ一昼夜かかった。

3月、北海道北松山は雪。長靴を履いて上野に降りたが、憧れの華の都東京は春。誰一人長靴を履いておらず、隆俊は恥ずかしさのあまり、急いで長靴をズボンで隠した記憶がある。弟秀夫の迎えを待つ上野公園、西郷隆盛像の前で「西郷隆盛は草履、俺は長靴で東京に来た。よし俺も東京で頑張るぞ」と西郷隆盛像を眺めて誓った。

下宿先は、兄哲夫の下宿先の近くにした。インタン先も、兄の勧めもあり兄が勤務する東京医科大学の東光平教授、病理教室の大高裕一教授、所安夫教授。実験記録の

私生活では時間を見つけては病院の仲間たちが、東京見物に引っぱり回してくれた。皆、気の置けない仲間たちで、東京の生活が楽しくて仕方なかった。そのため、1年の予定だった隆俊のインターン生活はあつと

いう間に過ぎ、ずるずると東京に居残ってしまうことになる。そんな時、兄哲夫から、

そんな時、兄哲夫から、

## 大成功の裏に努力

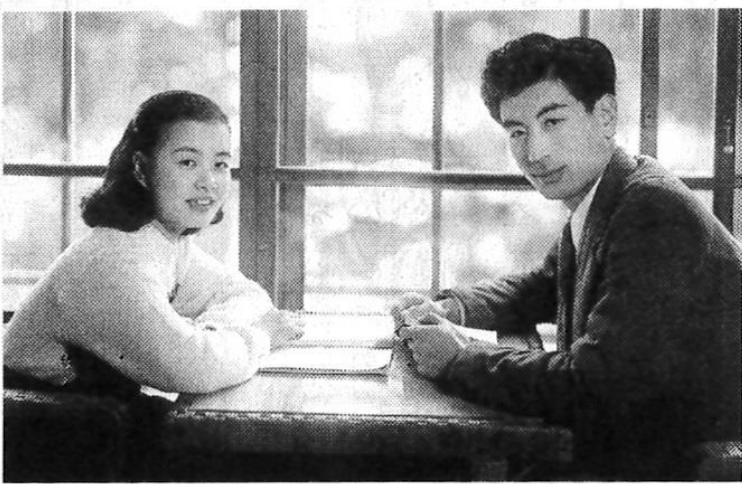
レコードデビューしたばかりの美空ひばりの家庭教師の依頼があるという話を聞かされた。美空ひばりは、まだ駆け出しで地方巡業が多く学校に行けなかったのが、女性の家庭教師をつけたがうまくいかなかった。そこで男性の家庭教師に代えてみようといふことになり、知り合いの病院長を通じて哲夫のところの話が舞い込んだ、というわけだ。

病院の勤務が忙しいので、3兄弟で分担してひばりの家庭教師をすることになった。巡業先にも付いていくのだが、哲夫が甲信越、隆俊が関西、秀夫が東北と担当をブロック分けして、ひばりが中学を卒業するまでサポートした。

美空ひばりの国語力は、お世辞ではなく抜群だと、隆俊は感じた。仕事で歌詞の意味を考えたり、台本を読み込んだりする中で力が付いたのではないかと思っっている。

何より美空ひばりは頑張り屋だった。自分の課題ができないと涙を流し悔しがる。あの頑張りが不世出の天才を生んだのだ。あれほどの大成功の裏には、抜群の才能ばかりではなく人知れず努力したことがあったのだと隆俊は思っている。

隆俊は当時中学生の美空ひばり(左)の家庭教師を務めていた(1951年)



(敬称略) 火曜日掲載